す。地域の人には自分たちを上手に利用してほしいですね。

【委員】家庭医療の実習を通して感じたことがありますか。

【学生】とてもよい経験で、1週間ではなく2週間でもいいと思います。

大学としての責任感

【委員】大学としてめざす将来像はどうですか。

【朴先生】質の高いプライマリーケアを整えるため、国として専門医制度を整備しその一つに総合診療専門医があります。開業医の2割程度は家庭医、残りが専門のクリニックになると予想されています。

自治体や地域から求められ、大学が派遣する医師の個人差が少なくありません。期待されている家庭医療への考え方に応えられていないことに対して、大学として責任は感じています。医師の考え方の底上げのため、こういう施設が必要だったんです。

【委員】実習で印象に残っていることがありますか。

【学生】患者さんと話すと、地域の人に育ててもらってるんだなぁ、ということを強く感じます。

【朴先生】沖縄では「島医者は島が育てる」という言葉があります。臓器を相手に仕事しているわけじゃなく人が相手の仕事なんだ、と再認識しています。

【委員】そういう意味では、地域との関わり方にも一工夫が必要ですよね。

【朴先生】自分自身もようやく慣れてきましたし、今後は地域の文化や良いところ、不便なところも経験してもらえる仕組みは考えていきたいですね。

先生の指導を受ける学生

大山小学校からも見学に

近所の店で買い物をする朴先生

取材を終えて

町としては長年の課題であった固定医の確保、大学としては家庭医療を実践的に学ぶ機会、をそれぞれに手に入れようやく動き始めた。

朴先生は、地域が求める医療を明確にする必要性も話しておられた。たしかに多くの専門医を地域医療に求めるのは現実的ではない。医療に限った話ではないが、地域や町として何を求め、どう人材を育てていくのかを考えるのはとても大切だ。学生が学ぶ家庭医療教育ステーションではあるが、実は我々の方こそ教わることが多いのではなかろうかと考えさせられた。

遠くない将来、ここで学んだ学生がどのような医師になるのか、楽しみに思いつつ取材を終えた。